



.....
 監督＝クリント・イーストウッド／出演＝ショーン・ベン／ケビン・ベーコン／ティム・ロビンス（ワーナー・ブラザーズ映画配給／2003年アメリカ映画／138分）

幼なじみの3人には、少年時代の消すことのできない忌まわしい記憶が……。その3人が25年後、1人は殺された娘の父親として、1人は刑事として、1人は容疑者として対面することに。犯人探しのミステリーだけではなく、この中で描かれる3人三様の複雑な人間模様は、アカデミー賞候補当然と思われる力作。しかし、映画の結末はどれも今ひとつ……？

🎬 3人の少年時代の忌まわしい記憶

この映画は今どき珍しく白黒の画面。そしてここはボストンのダウンタウンに近いイーストバッキンガム地区。11歳になるジミー、デイブ、ショーンの3人の少年が路上で遊んでいたが、悪ガキ(?)の3人は、ちょっとしたワルさを思いつき、工事中の舗道に落書きを……。それを見とがめたのは、車に乗ったコワイおじさん(警察官?)。形式的にはこのおじさんの言うとおりの公共物の損壊だが所詮子供のいたずら。ちょっとした脅しとお説教で終わりだろうと思っていたら、何と3人のうちデイブは無理矢理、車の後部座席に放り込まれ、警官(?)に連行された。しかし、そんなことで警官がホントに子供を連行するのか? そう思ったとおりの、こいつらはインチキ警官。そればかりか、何とこいつらは幼い男の子を誘拐・監禁し、性的好奇心の対象としてその欲望を満たしたのだった。デイブは4日間の監禁から何とか脱出したものの肉体的・精神的に大きな傷を受けた。そしてまた、誰が選ばれてもおかしくなかったこの時の状況を考えれば、

あとの2人にも、この忌まわしい体験は大きな心の傷となった。そして、そんな微妙な関係の3人の男の子たちにも、25年という年月が経った。

25年後の3人は？

最も直接的な被害を受けたデイク（ティム・ロビンズ）は、今は大柄（ちょっとデブ）な中年男。高校時代は野球の花形選手として活躍したらしいが、今はひっそりと地元で生きているだけの存在。その妻セレステ（マーシャ・ゲイ・ハーデン）との間に1人息子がおり、デイクにとってはこの息子と野球をして遊ぶのが唯一の楽しみ。

次にゴールデングローブ賞とアカデミー賞の優秀主演男優賞にノミネートされたのは19歳の娘を殺された父親ジミー・マーカム役を演じたショーン・ベン。『アイ・アム・サム』（01年）での、知能遅れの優しくて心の純朴な、ちょっと問の抜けた中年男役とはうって変わり、とにかくハードな役。今はコンビニの経営者としておさまっているが、彼には実は暗い過去があり、服役した経験も。そして裏社会の友人とのつながりは今なお続いていた。

ジミーには3人の女の子がいるが、下の2人は現在の妻アナベス（ローラ・リニー）との間に生まれた子供。被害者となる19歳の愛娘ケイティ（エミー・ロッサム）は、実は離婚した前の妻との間の子供。普通こんな場合、長女ケイティと、再婚した母親やハラ違いの娘たちとの間にはギクシャクしたものが生まれがちだが、このジミーの家庭は違う。これはすごく立派。ジミーは裏社会にも通じる人間だが、妻や子供を愛する気持ではピカイチだし、妻のアナベスもこの夫を信じついでいく気持はピカイチ。この2人の「夫婦愛」が、この映画の人物像に深みをもたせていることはまちがいない。

3人の中で一番出世したのは刑事のショーン（ケビン・ベーコン）。ショーンは相棒のホワイト（ローレンス・フィッシュバーン）といつも一緒に行動し、ホワイトには少し心を許すものの、刑事という職業柄のうえ、少年時代の忌まわしい体験のためか性格は少しひん曲がっている。少年時代の2人の友人に対しても今は、「友人なんかじゃない！」と断言する始末。そして、この映画でショーンの性格に深み（？）をもたせているのが、このショーンに（多分）愛

想を尽かして出て行った妻。面白いことにこの妻は、時々ショーンの携帯電話に「無言電話」を入れるだけの役割。だからこの妻の顔はラスト近くになるまで見えず、一体誰が扮しているのか、またそれが一体どんな役割をもっているのかもサッパリわからない。しかし最後には……？

セレステとアナベスはいとこ同士

デイブの妻セレステとジミーの妻アナベスとはいとこ同士。だからセレステは、愛娘ケイティーを失ったジミーを慰め、励まし、力づけようと懸命の努力をしている。しかし他方、セレステの胸の中には、夫デイブのあの日の夜の行動についての疑惑が……。なぜ、夫が襲われたという強盗や、夫がやり返したため死んだかもしれないという相手の記事が新聞に出ていないのか……。ひょっとしてこれは夫の作り話ではないのか……。ひょっとして夫がケイティーを……。考えれば考えるほどセレステの頭は混乱するばかり。

そして、それに輪をかけるのがワケのわからんことばかりいうようになったデイブ。ハタ目から見れば、「ちゃんと説明をすればいいのに」と思うが、実はデイブには少年の日のあの忌まわしい記憶がトラウマのようにずっと残り、何かにつけてそれが精神状態に影響を及ぼしていたのだった。

このようなミステリードラマにおいては、3人の男たちが主役となるため、デイブの妻セレステやジミーの妻アナベスは、ちょっとした飾りモノ的な役割になるケースが多いが、この映画は全然そうではない。犯人探しやジミー、デイブの心の動きに大きな影響を及ぼす2人の存在感は大きく、とりわけデイブの妻セレステの心の乱れが、この映画の核心に結びついていくことになっていく……。

19歳のケイティーは誰に殺されたのか？

「今晚は友人たちと楽しみに行く」と告げる娘ケイティーに対し、父親のジミーは「楽しんでおいで」とこれを送り出した。友人と2人で静かに酒を飲んでいたらデイブたちのバーに突如華やかな声が聞こえたかと思うと、そこに現れたのはケイティーたち3人の若い女の子。彼女たちはビールを注文し、派手なダンスに夢中。まわりの男性客はビックリだ。ケイティーをよく知っているデイブには、

この時のケイティーは幸せそうに見えたが……。その日、遂にケイティーは家に帰って来ず、翌日無残な姿となって発見された。

容疑者デイブ

デイブたちが飲んでいたのは、家のすぐ近くの行きつけのバー。家まで歩いて数分の距離だ。ところが、その日デイブが家に帰ったのは午前3時頃。「今まで何をしていたの！」と言いながらこれを迎えた妻のセレステの目には、血だらけとなり、手や腹に大ケガを負ったデイブの姿が……。

「強盗に襲われた。それをやり返して、その男の頭を打ちつけた。何度も何度も。ヤツは死んだかもしれない……」と言うデイブの説明を信じ、セレステはその介抱につとめたが……。翌日も翌々日も、その強盗の記事は新聞に出ない。逆に街中はケイティー殺害のニュースによってパニック状態に。こんな中、セレステの頭はしだいと混乱し……。

犯人を調べているショーンとホワイティーのチームにより、右手のケガについてのデイブの説明がインチキなこと、またバーから自宅へ帰ったという行動にも疑問があることが明らかとなった。さらに、犯人への「復讐」のために警察とは別に犯人探しをするジミーとその裏社会の相棒たちにも、デイブが怪しいという情報が……。

もう1人の犯人候補は？

もう1人の犯人候補は、ジミーの店によく来ている若い男の客。彼はいつもしゃべれない唾の弟たちを連れているが、ジミーはこの男をなぜか嫌っている。ところがこの男は、ケイティーが店に来ないので代わりにジミーが店番をしていると、「今日はケイティーは来ないの？」と親しげに声をかけてきた。一体これはなぜなのだ？ ケイティーがいなくなった今、ケイティーにはどんなボーイフレンドがいたのか？ 誰とどんな予定を組んでいたのか？ そして一体自分の将来をどう考えていたのか？ 考えてみれば、わからないことだらけ……。

ところが、ケイティーの女友達などの事情聴取から明らかになったケイティーの男関係は、意外にも……？

犯人探しのミステリーの妙

この映画の面白味の1つはもちろん犯人探しのミステリー……。犯人はデイクかそれとも店に来ていた若い男か、それとも背後に隠れている第3の人物か？ ショーン刑事たちのテキパキとした捜査によって、少しずつ犯人像が詰められていくさまはスリリングで面白い。また、ジミーたちによる独自の裏社会からの「捜査」も、不気味だが興味深いもの。

同時に2人の犯人像

事件当日、夫デイクがどういう行動をとったのかわからないため、「ひょっとしてデイクがケイティーを殺したのでは……？」と疑っているセレステは、遂にその話をジミーに打ち明けた。そして、「デイクがケイティーを殺したと思っているのか？」と尋ねるジミーに対して、うなづくセレステ。そこからのジミーの行動は素早いもの。闇社会の2人の男とともに、デイクをバーに呼出し、酒を飲みながら話した拳げ句、「娘を殺したことを認めろ。認めれば命だけは助けてやる！」と迫り、ついにデイクは「自白」したが……。

デイクは本当にケイティー殺しの犯人だったのだろうか。

しかしこの場面は私には少し納得がいかない。ジミーの娘に対する愛情は十分にわかるし、犯人を一刻も早く見つけ出したいという気持も痛いほどわかる。しかしデイクのケガを含む弁解も少しは冷静に聞く必要があったのでは……？ さらに、この極限状態でのデイクの説明は、あの少年の日の忌まわしい記憶に起因するような事件だったのだからなおさらだ。なぜジミーはそれを冷静に聞く耳をもたなかったのだろうか……？

他方ショーンとホワイトティーも、ついに「犯人」を追いつめていた。それは何と……？

中途半端なラストシーン

ラストのシーンはパレードの場面に。そしてここに至って、ショーンには無言電話だけだった妻が今はヨリを戻して傍に寄り添っていた。ケイティーを失った

ジミーがどんな行動をとったかについても100%これを信頼している妻のアナベスも、残りの2人の子供たちと一緒に今ジミーと並んでいる。しかしダイブを失ったセレステは今1人、不安げにパレードの中をさまよっている……。そして最後に群衆の中でジミーを発見したショーンは、おふざけのように、指でピストルの形を作りバーンという真似。果たしてこれは、どんな結末と理解すればいいのだろうか？

それぞれの人物像の深みの見事さや人物描写とその心理描写の巧みさ、そして犯人探しのスリルは一級品の映画だけに、どうもこの最後だけは私にはちょっといただけないのだが……。

アカデミー賞の獲得は？

この『ミスティック・リバー』は2004年2月アカデミー賞主要6部門すなわち作品賞・監督賞（クリント・イーストウッド）・主演男優賞（ショーン・ペン）・助演男優賞（ティム・ロビンス）・助演女優賞（マーシャ・ゲイ・ハーデン）・脚色賞（ブライアン・ヘルゲランド）にノミネートされた。たしかにこの作品の「重み」と「深み」は監督と脚色によるものだし、俳優陣の演技は立派のひとつで十分な資格があることはまちがいない。

しかし、その対抗馬は超大作の『ロード・オブ・ザ・リングー王の帰還一』、『マスター・アンド・コマンダー』、さらに、特に多くのアメリカ人に感動を与えた『シービスケット』等だから、この暗くて地味な『ミスティック・リバー』がこれらとどこまでいい勝負をすることができるかは大いに見モノだ。

2004(平成16)年2月18日記



第76回アカデミー賞では、『ミスティック・リバー』は作品賞・監督賞こそ逃したものの（両賞を制したのは『ロード・オブ・ザ・リングー王の帰還一』）、主演・助演の2つの男優賞を獲得するなど大健闘だった。『マスター・アンド・コマンダー』は撮影賞、音響編集賞といった技術部門受賞にとどまり、作品賞ほかノミネートの『シービスケット』は無冠に終わった。